

TOPICS

南都銀行海外視察ミッション参加報告（広州・マカオ見本市視察）

今回の視察ミッション（10/17～10/20）では、昨年操業を開始した「広州トヨタ自動車」、また、中国の対外貿易最大の窓口で、輸出の10～20%が成約するという見本市「広州交易会」、さらに、観光・交流都市として成長を遂げているマカオで開催されたトイ・ギフト・家庭用品の見本市「メガマカオ」を訪問した。

高成長の続く中国において、珠江河口の広州、香港、マカオを結ぶ三角地帯を中心とする、いわゆる珠江デルタ地帯は、1978年の改革開放政策により設置された経済特区のなかでも、^{シンチン}深 圳、^{フーロイ}珠 海など最も早い時期に外資に開放された都市を擁し、また、一国二制度の元で西側の経済体制を残した香港、マカオも位置する、中国でも最も人口が密集し最も早くに経済近代化を果たした地域である。

広州市は、その行政的な中心地であり、日本、欧米を始めとした海外企業の進出が活発化し、実質の常住人口は約1,000万人と、北京市、上海市に次ぐ中国第3の大都市である。

〔1〕中国市場を見据えた「広州トヨタ」

広州トヨタ自動車有限会社は、2004年9月、広州汽車集団有限会社とトヨタ自動車がそれぞれ50%の出資により設立。2006年5月から生産を開始した。

生産ラインは、中国を始めアジア地域では高級車として位置づけられ評価も高い「カムリ」一車種に絞られ、ブランドの浸透が図られており、116の販社・販売店を展開し、年間13,000台から14,000台を製造販売する。

価格は、約20万人民元（日本円約300万円）。ターゲット層は、同額程度の年収の層で、日本では、年収で1,500万円クラスの上級層サラリーマンのイメージである。近年の経済成長、所得の増加に伴い、中国国内だけでも十分なマーケットサイズが見込まれ、日本への逆輸入や他のアジア諸国への輸出は視野に入っておらず、むしろ生産

ラインの増強が計画されているという。

工場では、生産性では定評のあるトヨタ独自の生産方式「ニンベンのある自動化」「ジャストインタイム」がここでも導入されており、生産技術だけではなく、生産管理技術も最先端を行く。

日本とは社会的風土や事業文化の異なる約4,300名の社員は、平均年齢が約23歳と若い。車の運転をしたことがない若者をワーカーとして短期間で育て上げるため、自社内に教育・職業訓練施設も設け、人材教育から力を入れている。

〔2〕アジア最大の見本市「広州交易会」

古くから中国随一の貿易港として栄え、アヘン戦争の舞台ともなった広東省の省都広州は、中華人民共和国成立後も発展し、特に対外経済開放政策導入後はめざましい成長をみている。

「広州交易会」は、中国政府が主催し、中国経済を牽引する企業が参加するアジア最大、世界でも第2位の総合輸出品見本市である。出展企業は、各省が輸出実績や技術力を厳しく審査し、まさに省の代表的な輸出商社・メーカーが出展している。

1957年の初回開催以来、毎年春と秋に開催され、近年は、春と秋にそれぞれ2期に分けて開催される。中国各地のあらゆる製品が一堂に会することから、大企業だけでなく中小企業にとっても有力な商談の場と



（左）「広州トヨタ自動車」にて



（右）「広州交易会」琶洲会場のエントランス（右）。隣接地にはさらに新しい会場も建設中である。



(左) アジア最大規模のカジノ、展示・会議施設などを備える「ベネチアン・マカオ・リゾート・ホテル」



(右) 都市機能の開発整備が進むマカオ（マカオタワーより）

なっており、今年の春期には、100カ国を超える国から、20万人に上るビジターがあった。

また、中国のWTO加盟後は外資系企業の出展も可能になり、最近では、外資系企業の現地法人づくりのきっかけとなるケースも増えているという。

会場は、古くからの「流花路（りゅうかる）会場」が繊維・雑貨製品関連企業を主体とし、近年新設された「琶洲（わしゅう）会場」は、IT関連や機械製品、金属製品などの企業が中心となっており、現在、隣接地にはさらに新会場が建設中である。

各季約1万5,000の中国企業、合弁企業が出展することから、中国の低コスト製品や新製品が網羅されており、さらに、明らかに日本の金型技術などが使われている製品なども散見され、商談や投資商談はもちろん、中国製品の最新事情を知るためや法的問題をチェックするためなどの情報収集にも有用と思われる。

〔3〕世界の交流センターとしての「マカオ」

今回のミッションでは、もう一つ、トイ・ギフト・家庭用品の見本市である「メガマカオ」を視察した。

中国のほか、東南アジア各国の製品の見本市であるが、特に注目されるのは、むしろその会場となったホテル複合施設「ベネチアン・マカオ・リゾート・ホテル」を始めとした、マカオの「世界の交流拠点」としての発展状況である。

同会場は今年8月にオープンしたばかりだが、会議・展示会場は約11万1,000㎡で、直接コンテナによる搬入も可能となっている。総面積は951,000㎡、ホテル部分の総客室数は全室スイートルームの3,000室、39階建ての施設はアジア最大である。

さらには、ベネチアを再現した運河が流れるショッ

ピングモールには、最終完成時点には世界的なブランドが350店出店する。また、アジア最大規模のカジノのほか、宴会場もアジア最大規模で、室内に柱のない設計で1万5,000人の着席が可能。施設内にはアリーナもあり、1万5,000人の観衆が収容可能という。

マカオは、中国本土に突き出たマカオ半島と、タイパ島、コロアネ島という二つの島から構成されるが、現在これらは、橋や埋め立てにより

密接にリンクしており、中国政府及びマカオ特別行政区当局は、珠江デルタ地域で重要な展示・会議都市、観光都市に転換しようとして意図している。

伝統的な産業であるカジノについても、2002年には、カジノ経営権の国際入札を実施し、新たに香港系、アメリカ系の企業が進出した。これ以降、外資の大型投資が相次ぎ、2006年にはカジノ売り上げが69.5億米ドルに達し、米国ラスベガスの推計65億ドルを超えて世界最大のカジノ都市となった。

また、2005年には12カ所の歴史的・宗教的建築物などが世界文化遺産に登録されたこともあり、観光客も1999年の750万人から2005年の1,900万人と急増。観光産業の隆盛で経済は活況を呈している。

〔4〕おわりに

中国国内では、巨大な人口と低人件費に基づいた生産力のみではなく、所得向上により国内需要・消費も相当な成長が見込まれ、国内マーケットをにらんでの海外からの投資もあふれている。

海外からの企業進出においても、生産設備や技術に加えて、生産管理システムも同時に導入され、研究・開発力を除けば、生産面での競争力の向上は驚異的なスピードといえる。

見本市で実感するのは、かなり高度な技術力の製品まで全てそろっているのが現状であり、品質保証力やサービス・メンテナンス体制が向上すれば、さらに競争力は増すと思われることである。

ただ、いずれは、安全性という最も基礎的な品質、大気や水質の汚染といった公害、知的所有権に絡む法的な問題、膨張を続ける巨大な成長力のコントロール力を問われる時期も到来しよう。

(山城 満)